ここしかないんだ、ここがダメなら私学は諦める、そういう覚悟をもった親御さんに来てほしいと思っています。

立教小学校校長
西村由紀夫さん

――家庭学習だけで合格したケースが毎年10数名いるようですね。

西村　ええ、いちいち確認しているわけではありませんが、毎年、それくらいのお子さんが合格していると思います。ご承知の通り、私どもの学校はペーパーテストを実施していません。就学前の子どもにとって、ペーパーの勉強はあまり好ましくないと考えてのことです。受験のための準備は幼児教室ではなく家庭が主体であるべきだと思っています。ですから、幼児教室に通わないで合格するお子さんがいても不思議でも何でもありません。本当はそういう子どもが欲しいと思っているほどです(笑)。我々にしても、入試問題をつくるに際しては、普通に育っていれば経験していることや、知っていて当然の知識とか常識、あるいはマナーというのか、躾ですね、それと家族で触れ合う中で培われたものといったものを題材にしていますから、幼児教室に通わなければ解けないという問題は少ないと思います。

●「やらされている子」は中学校に入ってからが問題

――核家族化の一方で共働き家庭が増えていますから、家庭だけで準備するのはむずかしいという事情もあるようです。

西村　ええ。ただ、受験準備のすべてを幼児教室に丸投げしている保護者も少なくないという話も聞いています。経済的にゆとりがあるから、あるいは自分の趣味などに時間を割きたいといった理由で、家庭教師や塾などに通わせているのでしょうが、さて、そういう考え方でいいのかどうか疑問です。というのも、本人が「(勉強を)やらされている」と感じている場合が多く、中学校、高校に行ってから伸び悩むケースもあるからです。

――塾や幼児教室などで一生懸命勉強してきた子はテストではいい点数をとるのではありませんか。

西村　ええ。入学してからもしばらくの間はテストの成績もいいですね。しかし、一学期後半くらいになると、早期教育で鍛えられた子もそうでない子もあまり差がなくなります。それよりも気になるのは、「やらされている子」というのは、中学校に入ってから成績がガクンと落ちるケースが少なくないのです。小さい頃から塾に通っていたとか家庭教師がついているという環境で育った場合、自分で目標をつくって努力しているわけではありませんから、どうしても「やらされている」という気持ちがある。自ら挑戦するとか、自分で考えてこれをやろうという向上心、闘争心も含めてのことですが、そういったものがきちんと育っていませんから、外から中学校に上がってきた子どもたちと対等に競争していけないのです。

――6歳までに、自分で工夫する力や頑張る力といった「下地」ができ

ている子が望ましいとも言えるわけですね。

西村　ええ。

●子育てにも工夫が必要

――幼児性が抜け切れていない子が多いと言われていますが、なぜだと思いますか。

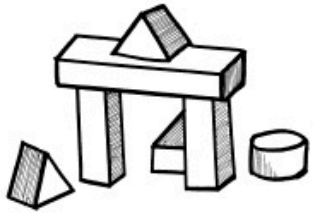
西村　何でもお母さんが先回りしてしまうからじゃないですか（笑）。石に躓いてちょっとぐらい痛い思いをしたほうがいいと思うんだけれど、母親は先回りして石をどけてしまう。昔はというと、若い人には嫌がられるかも知れないけれど、子どもの数も多かったから、母親の目が行き届かないこともあった。教えてもらいたいとか相談したいことがあっても、母親は家事が忙しかったり下の子どもの世話で手が離せない。だから自分で考えるしかなかったんですね。やむなくというか、自然と、今は静かにしていたほうがいいとか、ここは危ないとか、早く逃げたほうがいいとか、これ以上登ったら落ちるとか、そういうことをいろいろ経験しているから、子どもなりにいろいろな状況に応じた判断力が身についていたと思うんです。今は、逆です。ちょっとオーバーな言い方ですが、いつもママが側についていて、お腹が空いたとか喉が乾いたと言わなくても、おやつの時間になればおやつがさっと出てくるし、お水も出てくる。外に出ても、危ないから走ってはダメと、しっかり手を握られている。夜は寝つくまで本を読んでくれる。昔のほうがよかったということではなく、子どもを取り巻く環境がそうであるなら、それはそれで受け入れて、子育てにも工夫が必要だと思いますね。

●きちんと子育てをしている家庭の子どもがほしい

西村　もう一つ、最近の若いお父さんお母さんは学校教育に頼り過ぎている部分が多いように思います。家庭教育なくして学校教育はあり得ないんですよ。挨拶とか言葉遣い、公共のルールを守る、あるいは道徳心といったものは、私立を受験するしないにかかわらず、家庭で身につけなければいけない基本中の基本です。

何も特別なことを要求しているわけじゃないんです。何かをしてもらったら、ありがとうとお礼を言う。外で顔見知りの大人に会ったら先に挨拶をする、服装はきちんとするといったことです。おじいちゃんやおばあちゃんがいる家庭では、小さいうちからきちんと教えていましたね。今のお母さん方は立派な学歴をもっているのですが、わが子の子育てに関しては、挨拶や躾など、肝心な部分が抜け落ちているんじゃないかと思います。しかも、わが子の子育てに自信がもてない。これでいいのか、間違っているんじゃないかと、常に不安なんですね。子育てに教科書はいらないんですよ。自分の子どもなんだから、常識に外れていない限り、思ったとおりに育てればいいんです。

なぜこういう基本的なことを申し上げるかというと、きちんと家庭でしつけられている子、友達と遊んだりケンカしたり、いろんな体験を積み重ねている子というのは、集団生活にすっと入っていけるし、吸収も早い。当然、成績もいいのです。それぞれのご家庭の信念を持って、きちんと子育てをしているご家庭の子どもをほしいと思っています。これはどこの学校でも同じだと思いますね。



●面接では直感的なものを重視する

――両親面接がありますね。

西村　校長、教頭、事務長の３人で、ほぼ１カ月ぐらいかけてご両親にお会いします。１組あたり10分くらいしか時間がとれませんが、できるだけご両親との一問一答の中から何らかの心証が得られるように努力しています。ご両親それぞれのお人柄や人生観、仕事観、家庭観、あるいはどんなお考えでお子さんを育てているのか、ご家族の日常生活の一端でも推測できればいいと思っています。ただ、極めて短い時間ですから、直感的なものを大事にしています。お目にかかったときの印象やお話の内容などから、この人はいいな‥‥と。それが直感的なものであったとしても、私と教頭と事務長の３人が同じような印象であれば、それでよしとしています。３人の印象がそれぞれ食い違うというケースはめったにありません。

――「この人はいいな」の中身は何ですか？

西村　個々のケースによって違います。このご両親のお子さんなら間違いないだろうとか、お父さんは温厚そうだから長くおつき合いできそうだとか、経済的にも安定しているようだとか、まあ、そう感じた、そう思ったという印象です。

――合否は子どもの成績プラス親の面接評価で決まりますか。

西村　子どもの成績というのは、いろんなところで練習をしたり、あるいは家庭でしっかりしつけていますから、合格圏内に入った子どもの点数に大きな差はありません。同じ点数の子どもがごそっといるというのが実際です。その中で、どの子を選ぶかということになってきたときは、面接のときの保護者の評価が影響してくる場合もありますが、原則として、合否は子どもの成績だけで決まります。このご両親はすばらしいと思ったときは、たいていは子どもの成績もいいのです。

●子どもの後ろ側にある家庭環境も見る

――こちらはペーパーテストがありませんから、子どもの評価に差をつけるのはむずかしいでしょうね。

西村　そうですね。ペーパーテストであれば、正解と思うものに○をつけるとか指さすという方法で点数をつけられますが、僕らのところはそういうわけにはいきません。集団行動や制作、あるいは教師との一問一答などを通じて、その子の資質や能力を推し量るだけでなく、子どもの後ろ側にある家庭環境などを見なければなりません。そこに評価のむずかしさがあります。教師の問いかけ一つとっても、「これ」「あれ」の答え方ですむような聞き方はしません。こちらの質問に対して、自分で考え、言葉で説明しなければならないような質問をするようにしています。絵本を読んで、そのときの主人公の心の動きとか、どんな気持ちになったのか、その辺がきちんと言葉で表現できるかどうか、そういったことも一つのポイントになりますね。教師が問題を出す前に、いきなり「これとこれ」と答えた子どもがいたんですよ。どうも、午前中のテストの様子を知った人が、午後に受験する子ども達にいろいろと教えていたらしいのです（笑）。

●磨けば光る‥‥教える立場で評価する

――こちらの先生方には、自然と子どもを見る眼力がついてくると思いますが‥‥。

西村　そうありたいですね。５歳６歳にもなると、今、自分がどんな状況におかれていて、どう演じたら高い点がもらえるかがわかっています。

積極性、快活さ、素直さ、協調性、思いやり、リーダーシップ‥‥それぞれどんな場面で、どう演じたらいいかはしっかり練習しています（笑）。でも、試験に立ち会う教師は、毎年、何百人もの子どもたちを観察しているし、その子たちの入学後の様子もわかっていますから、トレーニングで身についたものかそうでないかを見分けるだけの眼力はあると思っています。それでも、高学年になってから、かんしゃくを起こすような子もいるのですから、完璧というわけにはいきません。ペーパーテストのように、正解は一つしかないというテストではありませんから、基本的に客観的な評価はむずかしいと思います。ただ、試験に立ち会い、採点する教師たちは、教える立場からの視点で評価します。この子は伸びそうだとか、磨けば光るものをもっていそうだとか、教えやすい子か‥‥と。

――入試を担当する先生方は、自分が教えるかもしれないから真剣にチェックするでしょうね。

西村　ええ。極端な例かもしれませんが、テストの成績がよくても、立ち会った教師全員から、こういう子どもは困るとチェックが入った場合、無条件に合格させるわけにはいきませんね。そういう教師の長年の勘というか、この子は教えにくいと直感的に感じる印象は評価の対象になります。

●説明会に何度も出席している保護者はわかっています

――立教小学校を受験する保護者へのアドバイスをお願いします。

西村　まあ、立教小学校がどんな学校なのか、そこをよく研究した上で受験してほしい、この一語に尽きます。この学校ではこういう教育をしてくれるから子どもを入れたい、この学校しかないという保護者に来てほしいと思っています。３校も４校も受験して、その中から入学する学校を選ぶというのではなくて、ここしかないんだ、ここがダメなら私学は諦める、そういう覚悟をもった親御さんに来てほしいと思っています。

――その「覚悟」をどうやって見分けますか。

西村　同窓生とか兄や姉が在校生であれば、本校のことはよく理解していただいていると思いますね。そういうかかわりのない保護者であっても、お会いしてみると、どういう理由で希望しておられるのか、その熱意の度合いなどはこちらに伝わります。中には学校説明会やいろいろな催し物に２回も３回も来られて準備をされる保護者もいます。そういう親御さんというのはこちらでもわかっています。この学校一本に絞ってきましたとおっしゃる親御さんもいますが、それが演技かどうかはわかりますよ（笑）。

――ありがとうございました。